

キャスターという仕事（続）

付せんがついたところを読み返してみると、やはり印象に残ることが多い。〈クローズアップ現代〉の番組を思い出しながら、ひきつづき順に紹介していきたい。

2016年2月22日に放送された、「広がる労働崩壊～公共サービスの担い手に何が」。この放送では、保育や建設現場などの公共サービスや公共工事を担う現場で、受注競争による価格の低下によって担い手の労働者の賃金低下が進み、経済的に追い詰められている状況とその打開策を描いた。この番組の制作プロセスには、23年間、キャスターを担当してきた私自身の反省と思いが込められている気がする。キャスターを継続して担当してきたことで生まれてきた「時間軸」からの視点によって、視点の力点、前説の力点が変わってくる。〈クローズアップ現代〉の歴史のなかでは、自治体の非効率性を指摘したり、経費の無駄遣いをたびたび指摘してきたことを踏まえれば、「その指摘が結果として生み出したものは何か？」という思いを忘れるわけにはいかなかった。

2014年7月3日放送の「集団的自衛権 菅官房長官に問う」。閣議決定で憲法解釈の変更を行い、集団的自衛権の部分的行使を可能にしたことについて、スタジオで政治部記者とともに、菅義偉官房長官にインタビューをした。……（この）インタビューは、様々なメディアで、首相官邸周辺の不評を買ったとの報道がなされた。それが事実かどうか私は知らないが、もしそうだとすれば、「しかし」という切り返しの言葉を繰り返したことが、不評を買うことにつながったのかもしれない。まだまだ、「聞くべきことはきちんと聞く、繰り返し聞く」ということには、様々な困難が伴うのだろうか。インタビューで私は多くの批判も受けてきたが、23年間、〈クローズアップ現代〉のキャスターとしての仕事の核は、問いを出し続けることであつたように思う。それはインタビューの相手にだけでなく、視聴者への問いかけであり、そして絶えず自らへの問いかけでもあつた。言葉による伝達ではなく、「言葉による問いかけ」。これが、23年前に抱いた、キャスターとは何をする仕事かという疑問に対する、私なりの答えかもしれない。

バブル崩壊の痛みが本格化するなかでスタートした〈クローズアップ現代〉の歴史は、日本の失われた10年、20年と重なる。目の前の課題を提示し、解決策の模索を続けてきたが、もっと長期的で幅広い目線で問題提起が出来ていたらとも思う。 —続く

(2017年2月19日)

